

れ、二か月後、中華大覚寺で挙行された結願法要は玄奘以来の「弘法」をめぐる中華民族の壮挙として大々的に喧伝された。

筆者は二〇一八年三月に大覚寺を訪問し、本堂を囲む回廊全体に当該イベントの成就を記念する紅白を基調としたパネルが展示され、併せて境内の随所に、N師と一帯一路の揺るぎない結束を示す政治宣伝が掲げられている状況をつぶさに確認した。その時点では、ブッタガヤ唯一の中国本土系僧院である当寺が仏教外交の急先鋒であることは疑い得ない事実であった。ところが、翌年三月に同寺を再訪した所、回廊を埋めつくしていたパネルや横断幕は全て撤去されており、境内では改修工事が進められていた。筆者が信徒代表のC氏に事情を尋ねたところ、二か月前にC氏を筆頭とするインド華僑によってN師は追放され、現在はC氏と同じ梅州出身の尼僧が運営を束ねているという。C氏によれば、N師の一連の行為は、各種法事から得られる莫大な布施の使い道も含め、創建時から当寺を支えてきた古参の梅州系印僑信徒の意に全く沿わないものであり、二〇一一年に北京の中国仏教協会の肝いりで彼が住持に座って以来、当寺は乗っ取りに遭ったも同然の状態だったという。

世界仏教の中心地で起こった本件事は、中国主導の仏教外交がN師のような民間のチャネルを介さざるを得ないが故に生じる非統一性と、それに起因する脆弱性の一つの表れである。端的に言えば、「仏法が来た道」を一帯一路に組み込もうとする中華民族の夢は、インドに土着した華人たちのローカルな信仰基盤を覆すには未だ時期尚早だったのである。

#### 韓国キリスト教会のプロライフ運動

——「ベビーボックス」の挑戦——

刈上 恭子

二〇〇九年十二月、大韓イエス教長老会主サラン共同体教会（ソウル市冠岳区）の李鐘樂牧師が、産みの親が育てられない子を「緊急保護」するための「ベビーボックス」を開設した。開設の翌年の二〇一〇年にそこに遺棄された子は四人であったが、二〇一二年に「入養（養子縁組）特例法」が施行されると、遺棄される嬰兒が急増し、「ベビーボックス」の是非をめぐる白熱した議論が交わされるようになった。「入養特例法」は、産みの親が出生届を出せば、国が養子縁組の世話をすることを定めているが、未婚で子を産んだことを隠したがる女性達が、出生届を出さず「ベビーボックス」に子供を遺棄している。「ベビーボックス」には、婚外子のみならず障害のある乳児等も遺棄されており、二〇一八年末までに一五〇〇人余りの嬰兒達が遺棄されている。「ベビーボックス」は、生命の危機に瀕した子供達を救っている一方で、嬰兒遺棄を助長しているという批判を免れないでいる。本報告において、「ベビーボックス」の是非をめぐる論点を解明し、韓国教会のプロライフ運動が直面する課題を探ってゆきたい。

「入養特例法」は、韓国内での養子縁組を活性化することによって、未婚母による嬰兒遺棄を防止することを意図したものである。今日の韓国では「低出産（少子化）問題」の解決が政府の最重要課題の一つとなっており、未婚母に対する支援が「低出産問題」の解決の一助と認識されている。

韓国は、世界で最も多くの孤児を海外に送り出してきた「孤児輸出国」として知られている。韓国が経済発展を遂げた今日、未婚母の子や障害児の「輸出」を続けることに対して、内外からの批判が避けられなくなっている。「孤児輸出国」の汚名を返上するべく、韓国は、二〇一二年に「入養特例法」を施行するとともにハーグ条約に加盟し、国内入養を優先する方針を表明している。そうした政府の方針に沿って、主サラン共同体教会でも国内養子縁組を支援しており、牧師夫妻が「ベビーボックス」に遺棄された障害児等を自ら養子にして、国内養子縁組の推進を図っている。

「ベビーボックス」に対しては、産みの親の身元を問わないことによって、安易な子棄てを助長するのではないかという批判が付きまわっている。だが、「ベビーボックス」は、子棄てをした親を免責することを意図したのではなく、産みの親の抱える事情に配慮し、子供が産みの親の身元を知るための手がかりを残した上で、子供の生命を守ることを最優先するものである。

李鐘樂牧師は、韓国社会が「ベビーボックス」の意義を認識し、身元が露呈することを恐れて子供を遺棄する親がいなくなるよう、母親の身元情報が医療機関に開示されることなく出産ができる「匿名（内密）出産制度」の導入を国会に請願している。これまで、韓国では、「ベビーボックス」を設置した主サラン共同体教会や、そこに嬰兒を遺棄する未婚母等を非難することはあっても、未婚母等が何故子棄てをするのか、どうすれば未婚母達が子供を棄てなくてすむのか考えることがなかった

ように思われる。李鐘樂牧師が望んでいるのは、主サラン共同体教会の「ベビーボックス」が有名になることではなく、「ベビーボックス」の知らない社会が到来することである。韓国で「匿名出産」が認められ、未婚で妊娠しても子供を産み育てることのできる社会の仕組みが整ったあかつきには、未婚母に対する差別や偏見が薄らいでゆき、「ベビーボックス」に子供を棄てに来る親がいなくなることであろう。「ベビーボックス」が必要なくなるその日まで、私は闘う！と宣言した李鐘樂牧師の祈りが天に届くことを願っている。

#### 「崔順実ゲート」における巫俗批判の諸相

新里 喜宣

本発表は、二〇一六年から一七年にかけて韓国を揺るがした「崔順実ゲート」の巫俗言説、とくに巫俗批判の諸相を探ることを目的とする。崔順実ゲートについては政治学、社会学、経済学など、多様な分野からの接近が可能だと考えられるが、大々的な巫俗批判が行われた点を踏まえると、一連の政治問題に対しては宗教学からの接近も求められる。

一九六〇年代および七〇年代にキリスト教の異端研究を推進した卓明煥による記録、そして二〇一四年のセウォル号関連の公判での証言などから、崔順実の父・崔太敏および崔順実の元夫・鄭潤会と巫俗に一定の関連性が認められるのは否定できない。崔太敏は牧師として活動する以前にムーダンに近い活動をしていたようであり、鄭潤会はセウォル号事件の当日、ムーダン（古い師、漢学者とも表記）と共にいたことを証言してい